

「対話」篇『パイドロス』における〈メディア〉の問題

大黒 岳彦

『パイドロス』はプラトンの対話篇のなかでも規格化された解釈を拒む不思議な魅力^{たふ}を湛えている。プロットの本線は、一人の美少年を巡る二人の成人男性の恋の鞘当て合戦であり、したがって本篇のテーマの一つは「恋」(ἔρως)である。だがその本線の中に、弁論台本や三つの「物語」(μῦθος)が挿入され、弁論術や書き言葉の考察がなされる、といった具合で論脈は錯綜している。プラトン解釈史においても見解や評価が分かれる^{いわ}日く付きの作品である。だが、デリダなどは^{けいがん}炯眼にも、この論脈の錯綜にこそプラトン形而上学が生成する「哲学の現場」を見ており、またそれ以後の西洋哲学の伝統全体の秘密を解く鍵を鋭く嗅ぎつけてもいる。だが以下でのわれわれの『パイドロス』分析は、〈誰/何〉が「書き込み」の“主体”なのかという問題を解明するのに資する限りにおいて、メディア論的な見地からのみなされる。

作品は美少年パイドロスに“文盲”^{*1}の哲学者ソクラテスが、川がせせらぎ蟬が激しく鳴く郊外にまで誘いだされるシーンから始まる。パイドロスはソクラテスに自分を愛人にしようと言いつけてきている「弁論代作人」(λογόγραφος)リュシアス^{ロゴグラボス}が書いた「恋についての弁論原稿」(実はパイドロスに対するラブレター)の存在をチラつかせる。その内容が気になって仕方がないソクラテスはパイドロスにその文書の朗読をせがむ。

プラトンの対話篇の舞台となっている古代ギリシャの都市国家においてはソクラテスのような“文盲”のほうが多数派であって、文字を読み書けることのほうがむしろ特殊能力であることはテイクノートしておいてよい。すなわち古代ギリシャの都市国家は基本的には「声」メディアのパラダイムであり、そのパラダイムの中で新しいメディアである「文字」が寄生し蠢動しつつあった、いわば過渡期的状況ないしメディアの“科学革命”前夜にあったと見てよい。ソクラテスを^{こうし}嚆矢とする西洋哲学はまさに「声」から「文字」へのメディア・パラダイムの転換期にその産声をあげたのである。

さてソクラテスの恋敵であるリュシアスの職業、^{ロゴグラボス}弁論代作人は、^{なりわい}法廷弁論や政治演説を有利に展開するための弁論テクニックと知識の切り売りを生業としたソフィストと同様、^{ペジョラティヴ}侮蔑的呼称であって、弁論や演説の原稿を登壇者に成り代わって^{ダノーティ・セアウソン}代作する、いわば今でいうゴーストライターである。それに対してソクラテスは「無知の知」＝「汝自らを知れ」

*1 ソクラテスが「文字」を読み、書けたとする確たる証拠はどこにもない。が、他方で彼が完全な“文盲”であったことを証明する証拠もまたない。ただ『パイドロス』の中にソクラテスが「読めた」であろうことを示唆する箇所はある(266D ~ 267B)。ただし、これは飽くまでもプラトンによって創作されたソクラテス“像”であって、ソクラテスが実際に“文盲”ではなかったことの証拠としては根拠が薄弱である。

(γ γ ũ θ ι σ ε α ν τ ó ν) を武器にソフィストや弁論代作人たちに論争を挑み、相手の論拠を掘崩しながら最終的には「徳」(ἄ γ α θ ó ς) の重要性に気付かせ「魂」(φ ũ χ ῆ) の浄化を説く警世家である。

ここで重要なのは、「弁論代作人」vs.「哲学者」の美少年を巡る諍いが、同時に「文字」vs.「声」のメディア・パラダイムの優位如何を賭けての戦いでもある点である。「文字」パラダイムを代表するのがリュシ阿斯、「声」パラダイムを代表するのがソクラテスである。しかも戦いの場にリュシ阿斯本人はいない。この演出は作者であるプラトンの構成の妙であって、プラトンは意図的にリュシ阿斯を舞台には登場させない。なぜなら後で触れるとおりのプラトンは「文字」の本質を「書き手の不在」にみるからである。

戦いはリュシ阿斯が書いた文書のパイドロスによる朗読によって火蓋が切られる。リュシアスの文書に書かれている内容は大略以下のようなものである。曰く、君は君に恋している者にはなく、恋していない私のような者の愛人になるべきである。なぜなら熱愛中は恋する者は嫉妬深くなり君の行動を縛ろうとするし、熱が冷めたら今度は君を邪慳に扱うはずで、感情の起伏が甚だしく、関係は不安定で長続きしない。それに対して恋していない者は常に平常心で君との冷静な関係を保ち、君を優れた人間へと善導する。恋する者のように相手に余計なおべっかを使ったり猜疑心を抱くこともない。したがって君は私の愛人になるべきなのだ。

恋愛と結婚とは別、といった現代の女性の一昔前の処世術を彷彿させる内容だが、パイドロスはこのリュシアスの口説き文句に心酔した調子でソクラテスに朗読して聞かせ、ソクラテスの恋心を掻き立て挑発する。

ソクラテスは一時はパイドロスの挑発に乗り、「恋する者よりも恋していない者の愛人になる方がよい」という前提を保ったまま弁論テクニックをリュシ阿斯と競う。恋する者は欲望と感情の虜になっており、狂気に取り憑かれた放縦の徒である。恋に捕らわれない理性的な者に付き従う方がよい、と、その弁論はリュシ阿斯よりも明晰で説得力がある。だが弁舌の途中でソクラテスは論証すべき前提そのものを抛擲してしまう。リュシアスのように恋する者を恋していない者の下位に置くのは「恋の神」に対する冒瀆である。それはまた、いまソクラテスとパイドロスがいるこの場所、「学芸の女神」(Μ ο ũ σ α) の「精」(ν ú μ φ ῆ) である蟬や、「水の神」(Α χ ε λ ũ ο ς) が住まう神聖な場所を穢す所業でもある。

このあと一転ソクラテスはまるで穢れを清める儀式でも執り行うかのように恋する者の優位を主張し始める。それはまず「狂気」(μ α ν í ā) の擁護から始まる。恋する者がその廉で貶められた「狂気」は、それが神授のものであれば貶められるどころか称賛されるべきものである。実際、政に有用な「神託・予言術」(μ α ν τ ε í ā) はその語源からも察せられる通り「狂気」の一種である。「恋」はこうした神授の「狂気」であり、だからこそ恋をしていない者は恋する者の足元にも及ばない。

さらにソクラテスの舌鋒はリュシアスのプロフェッションである弁論術に対する容赦な

*1 プラトンによれば、蟬はもとは人間だったが「学芸の女神」とともに歌が世に現れると寝食を忘れて死ぬまで歌い歌い続け、以来その子孫が蟬になったという。249B～D。

い批判へと進んでいく。「文字」を使った単なる強弁と折伏しゃくぶくのテクニックである弁論術は、恋をしていない者が弄する詭弁と同様で、虚しい技術である。「対話」によって魂の浄化と神の高みを目指す「弁証法」ディアレクティケー ($\delta \iota \acute{\alpha} \lambda \epsilon \kappa \tau \iota \kappa \eta$) のみが真理を教えるのである。こうして最終的にソクラテスは、「哲学」ピロソ피아 ($\phi \iota \lambda \sigma \sigma \phi \acute{\iota} \alpha$) の「弁論術」レートリケー ($\rho \eta \tau \omicron \rho \iota \kappa \eta$) に対する優位の主張へと論を進めていく。

最初に断ったとおり、われわれはテキスト分析の作業をメディア論的な象限しょうげんに限定する。したがってこれ以上テキストの表面的な筋立てを追うことは止そう。ここからはメディア的観点からテキストの深層構造へと分け入っていく段取りである。

さて、ここで留意が必要なのは、前節でわれわれが追ったのは飽くまでも『パイドロス』という作品世界の“舞台”上で展開されている「ソクラテス vs.リュシ阿斯」の戦い、あるいは「ソクラテス vs.パイドロス」の対話という出来事、すなわち対象次元オブジェクト・レベルに属する出来事に過ぎないことである。そこには観察者・記述者としてのプラトンが計算に入っていない。すなわち認識次元メタ・レベルについての考慮が完全に欠落している。したがってこれ以後の議論では、プラトンという「作者」＝“舞台裏”をも考慮に入れつつ作品を分析しなければならない。

対象次元オブジェクト・レベルにおいて展開される出来事の軸は、リュシ阿斯によって代表される「文字」＝「弁論術」＝「恋をしていない者」＝「理性」の系列と、ソクラテスによって代表される「声」＝「哲学」＝「恋する者」＝「狂気」の系列との戦いである。パイドロスはこの戦いの、ひいき 鼻根目に見積もって“舞台廻し”、実質的には“傍観者”ギャラリーの役回りを演じているに過ぎない。「作者」であるプラトンは“舞台”上のソクラテスに“憑依”ひょういしつつ、彼をして自らを語らしめることで、「声」の側に、したがって「恋」に、「狂気」にそして「哲学」に軍配を上げる。

ソクラテス (=プラトン) いわ 曰く、「文字」は出自不明の“孤児”である。なぜなら「文字」はそれが書かれた具体的な「場」や「状況」、また「書き手」から離れ、本来の宛て先とは無関係な者へと届けられてしまう。「文字」は自らを生んだ“親”が誰なのかわからない。すなわち「文字」というメディアには本質的に“生みの親”の不在が付き纏う(だからこそパイドロスが朗読した原稿の書き手であるリュシ阿斯本人は“舞台”に一切登場しない)。さらに「文字」はそれを書いた者や書かれた状況から切り離されることで、書き手が与えた“生命”を失った“死せるもの”である。それに対して「声」は由緒正しき血筋を引く“嫡出子”アデルボス・グネーシオス ($\acute{\alpha} \delta \epsilon \lambda \phi \acute{o} \varsigma \gamma \nu \eta \sigma \iota \omicron \varsigma$) である。それは発声した“親”と常に共にあり、発声された状況から切り離されることはない。“親”から付与された“生命”を受け継ぎ、「声」が発せられた相手に確実にその“生命”を届ける。こうした「声」の特質ゆえにソクラテスは「文字」を決して読みもしなければ書きもせず、「声」による対面的「対話」ディアロゴス ($\delta \iota \acute{\alpha} \lambda \omicron \gamma \omicron \varsigma$) すなわち「弁証法」ディアレクティケー を駆使しつつ神への「狂気」マニアに満ちた「恋」エロース、「魂」プシューケーの浄化の営みである「哲学」ピロソ피아 を実践するのである。――

さて実は問題はここから始まる。プラトンはソクラテスに「声の優位」を、リュシ阿斯に対抗させつつパイドロスに向かって「語らせて」いる。それはよい。だが、プラトンそ

の人は「書いて」いる。プラトンはソクラテスによる「声の優位」という命題の真理性を「文字」で「書く」ことによって主張しているのである。対象次元オブジェクト・レベルでの「声」による「声の優位」の主張は何の問題もない。ここでは「声の優位」という主張（内容）と、それを主張する「声」という（形式）は一致しているからである。ところがプラトンの認識次元メタ・レベルでは、主張（内容）と、主張（形式）が食い違ってしまう、というより相互に矛盾を来してしまう。なぜならプラトンは「声の優位」という命題の真理性を「文字」という（形式）——真理性を剥奪された（形式）——によって主張しているからである。これでは（形式）が（内容）の真理性を否定し撤回してしまう。

ここで生じているのは集合論におけるラッセルのパラドックスと似た事態である。ラッセルのパラドックスとは「それ自身を元として含む集合」という「自己言及的」セルフ参照的（self-referential）な構造を持つ集合において生じるパラドックスである。簡単な例を挙げよう。エピメニデスが考案したとされる「クレタ人の嘘つき」という思考実験モデルである。「クレタ人は嘘つきである」という言明は発言者がクレタ人以外であればその内容が真理であっても虚偽であっても問題は生じない。ところがこの言明をクレタ人が行ったときには必然的にパラドックスが生じる。もし「クレタ人は嘘つき」という言明が真理であれば、それを発言しているクレタ人もまた嘘つきであり、彼の主張内容は虚偽であることになって言明の真理性は取り消される（すなわち「クレタ人は嘘つきではない」ことになる）。逆に言明が虚偽だとすれば、すなわち「クレタ人は嘘つきではない」とすれば、それを発言しているクレタ人は本当のことをいっているはずで、したがって「クレタ人は嘘つきである」という言明の虚偽性は撤回され、その言明は真理だということになる。

ここでクレタ人をプラトんに置き換えながら考えてみよう。プラトンが〈外部〉からソクラテスとリュシヤスとの対立を単に記述しているのであれば、そこには何の問題も生じない。ところが実際には、プラトンはソクラテスに“憑依”している、あるいはプラトンはソクラテスをして自らを語らしめている。〈外部〉的観察者であるはずのプラトンが観察対象の中に登場してしまっている！したがって「声の優位」というテーゼは、プラトンその人にも及ぼるを得ない。すなわち自己言及的なループがここには生じている。とすればプラトンが「文字」を使って主張すればするほど、ソクラテスの「声の優位」はその分だけ真理性を損ない、逆にソクラテスに「声の優位」を語らせれば語らせるだけ、プラトンは「文字」で自らの主張を表明することを断念せざるを得なくなる。

著者はプラトンが「声」と「文字」との折衷形態である、悪くいえば“中途半端”な「対話篇」という（形式）を採用した内在的理由はこのあたりにあるのではないかと忖度そんたくしている。すなわち「対話篇」（形式）とはソクラテスに心酔していた時期のプラトンが採らざるを得なかったいわば“苦肉の策”であって積極的な選択ではなかったのではないか？その証拠に晩年にプラトンがソクラテスから離れて独自の思想を打ち出していくに連れて、作品の「対話」的ダイナミズムは薄められていく（たとえば『ティマイオス』『クリティアス』『法律』においてそれは顕著である）。

プラトン自身はシュラクサイの僭主の義弟ディオンの宛てたとされる『第七書簡』のなかで「文字」を「書き」遺すことへの侮蔑を表明する（344C～E）一方で、『国家』篇においては来るべき理想国家から「声」パラダイムの伝統を担ってきた詩人の追放を表明し

でもいて、^{*1} どちらのメディアに優位を置くかについてはブレがある。だがプラトン自身が実際に「声」と「文字」のどちらに優位をおいていたかはそれほど重要ではない。

問題はプラトンの“意図”とは無関係に成立してしまっているメディアの構造の方である。もし存在するメディアが「声」しかないのであれば、その優位を主張する必要がそもそも生じない。「文字」という対抗的メディアが存在することで初めて「声」の優位を主張することが可能になる。あるいは「文字」の出現が「声」の優位の「可能性の条件」である。だが実は「声」によって「声の優位」の真理性を言い立てることは不可能である。「声」はその場限りの出来事であって、その真理性を「保存」するためには、発された「声」は「書き」留められなくてはならないからである。プラトンが実際のソクラテスの言動をその作品において忠実に再現しているかどうかに関わりなく、「対話」篇のかたちで彼の言行録を遺していなければ、そもそも哲学者ソクラテスは存在していない。問題は、「声の優位」は「文字」に「書か」れなければならない、というパラドキシカルな構造そのものなのである。

*1 第 X 卷 (595A ~ 608B)。E.A.ハヴロックは、その著『プラトン序説』において、後者の立場を採りつつ、『国家』篇を新興メディアである「文字」の立場からする、ホメロス以来の伝統的な「声」メディアによる教育批判として解釈する。